

がんばろう日本



東日本大震災で被災した岩手県大船渡市を支援する大隅半島4市5町復興支援チームは、8月31日をもって支援活動を終了いたしました。

震災直後の3月22日に結成し支援活動を行ってきたチームには、これまで27次隊241名の職員が派遣され、本町からも23名が支援活動を行いました。

当初、給水活動、救援物資の管理活動、被災した車両の管理の3部門からスタート。3月末からは、保健師による被災者健康調査を開始し、7月からは、義援金の支払いや相談などの窓口業務を担当してきました。

市内は、6月初旬にライフラインが復旧し、体育館などに身を寄せていた避難者は、仮設住宅に順次移動を始めています。また、少年団のスポーツ大会が開催されたり、飲食店などの商店が再開する動きも見られ、市民一丸となって復興に向かって、一步一步、歩み始めました。

しかしながら、いまだ町のいたるところには、ガレキが積み上げられ、美しい光景であったであろう町並みは、悲惨な光景のままです。

大隅半島4市5町復興支援チームは、今後も相互に連絡を取り合い、求められる支援に対応できる体制をとり続けます。復興は、まだ始まったばかり、一日も早い復旧・復興を願っています。共にがんばろう日本。

がんばっぺ大船渡。

第21次派遣 今吉孝志【総務課】

【7月20日～7月27日】

市街地のガレキは集積してあるものの、郊外では未だに流されたままのガレキがそのまま残されており、これらが本格的な復興の始まりであると感じました。

また、壮絶な経験を淡々と詳細に話される被災者の姿に触れ、大震災の及ぼした大きさを痛感し、非常時の支援のあり方について、再考の必要性を感じた一週間でした。

第23次派遣 仮水公司【社会教育課】

【8月1日～8月8日】

前隊の業務を引き継ぐ形で義援金事務を担当させていただきました。震災発生から5か月が経つ今でも被災地で活動している学生や外国人、他県のボランティア活動の姿を見るたびに、自身の役割を心苦しく思うこともありましたが、支援の輪の一部として、必ず被災者の方々の生活を照らすものだと業務にあたりました。

被災地では未だ言葉に出来ない現実、光景が広がっています。しかし、日本中、世界中の人たちの支援の輪のもと、牛歩ながら復興を目指し、必死に生きる人たちはたくましく、同じ一人の人間として尊敬の念を抱きました。

第25次派遣 福永浩二【保健福課】

【8月13日～8月20日】

大船渡市に到着すると、海岸から4キロ離れた宿泊所である公民館周辺はとてきれいな街並み。この辺りは被害が無かったんだと思い、近くの食堂に入ると、店内の壁の1m30cm程度のところ津波到達という線。店は被災し、改装された後でした。

震災から5か月、現地の方々が苦しい状況の中で、復興に向けて懸命に努力されていることに感銘を受けました。しかしながら海岸に近い地域は、復興に一步も近づけないほどのひどい状況のままです。自分にできる支援を今後も続けていこうと思えました。

第27次派遣 児玉卓治【税務課】

【8月25日～9月1日】

8月にもかかわらず、朝晩は肌寒く一足早い秋の訪れを大船渡市で感じました。津波が残した傷跡はまだ色濃く残っているものの、被災者の心の傷跡は少しずつ回復に向かっていようでした。家族全員を亡くした男性と隣り合わせになった食堂では、少しずつ笑顔が変わってきたと他のお客さんから教えてもらいました。

最後の派遣隊として宿泊していた公民館の片付けを終え出発する時、地域の多くの方々が感謝と慰労の言葉を書いた横断幕と再会を祈念して数十枚の黄色いハンカチを飾って見送っていただきました。感激しながら復興した大船渡市をまたいつか訪れてみたいと思えました。